
鼓星の下で ~The Sky Where You Were~

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼓星の下で ～The Sky Where You Were～

【コード】

N9218P

【作者名】

空

【あらすじ】

大戦後、西と東に分かれた日本。分断された空の下、生き別れとなった姉妹はそれぞれの道を歩むです。

国家という大きな大河に翻弄される中、姉妹に訪れる運命とは？

姉妹系航空妄想戦記スタートです。

R i g e l

湿気った空気が身を包み、木々の放つ濃い臭いが鼻を付く。木々だけではない。森に住む獣や虫達が発する様々な臭い。もっと深く、もっと深く獲物の臭いを嗅ごうと彼女は足を止め、大地を、そして木々の間をゆっくりと流れる大気を大きく吸い込んだ。

そこは緑が支配する世界。白より黒の多いその場所で彼女は周囲を見回すようにゆっくりと頭を動かしながら感覚が研ぎ澄まされていくのを実感していた。

本来の自分への回帰なのか。血が高揚する。

それは、作られた血ではなく、古来から体内に流れる赤い血に刻まれた狩りの記憶が呼びさまされているかのようにもあつた。

彼女は動かしていた頭をある一点で止めた。彼女の鼻は、この場所には本来いないはずの獣の臭いを確かに捉えていた。

間違うはずはない。それこそ自分が赤ん坊の頃より嗅ぎ続けてきた臭いなのだ。

彼女はゆっくりとその場に伏せた。それが獲物を見つけた時の合図だった。

彼女の頭に備えられた両の耳が伏せられ、動きを止めた体の変わりにピクピクと動く。

その動きは目標を捉えようとアンテナを回すレーダーのようにも見える。

虫の鳴き声や風に踊る木々のざわめき。その中で、湿った大地を踏みしめる獲物の足音を探すかのように耳を動かす。

「見つけたのか…」

伏せた彼女の後ろで下草が僅かに動く。声を掛けてきた男の顔は塗り練られた土で何時もより黒く見える。

掛けられた声に動かしていた耳を止め、彼女は男の方を一瞥した。そして、また一点の方向に顔を戻し、静かに合図を待つ。

カチカチと小さなクリック音が鳴る。

その音で、彼女は男が後ろにいる仲間達に合図を送っているのを理解した。

無線機と呼ばれる遙か遠くにいる仲間の声が聞こえる不思議な箱伏せて合図を待つ彼女は無線機がどういったモノかは知らなかったが、無線機がどういった働きをするものなのかは理解していた。

そして、それが自分にどういった関係を為すかも。無線機の横についたボタンを決まったりリズムで押す男。

彼女は知らなかったが、男の頬にあてられた骨伝導マイクは男と彼女に次の行動を伝えていた。

男の気配が高まる。それは戦いにつく雄の臭い。

彼女は自分の予想が間違っていないかったことを確信した。男の手が自分の首元に添えられる。

さあ、合図を！いつもの言葉を私に下さい。彼女は伏せる体に力を込めた。

男の顔が彼女の頭に近づけられる。男の吐く息に彼女の耳が微妙に揺れた。

「いけッ！」

男の言葉を合図に彼女は飛び出した。

目標は300メートル先を進む3人の獲物達。

大地を掴む四肢が彼女を一陣の風へと変える。

下草のトンネルを抜け、湿気った落ち葉で覆われた道を真っ直ぐに進む。

彼女の目が二人の少女と、その少女を守るようにして歩く男の背を捉えたのは間もなくのことだった。

繰り返されるあの日の夢。でも決まって顔が見えない。

逆光の中、顔が見えない姉に向かって「私」が必死に手を伸ばす。

「嫌だ！嫌だよー。一人にしないで！」

叫ぶ。心の底から私が叫んでいる。結末は分かっているというのに。

夢の中の私は何度も叫びながら、姉に向かって腕を伸ばす。

「大丈夫！すぐに戻ってくるから。すぐに戻ってくるからね」

光の向こう、泣く私を安心させるように姉が笑う。これも同じ。いつもと同じ。

顔が見えないのに姉が笑っているのが分かる。

「約束！かならず亜季の所に戻ってくる・・・約束するから」

安心させるように私の手を握る姉。でも私は結末を知っている。

約束、約束だからと姉は握った手を上下させる。でも、この約束

は果たされることはないのだ。

心の中で諦める。破局の足音はすぐ近くまで来ているはずだった。

「いたかつ!？」

「いません!何処に行つたんだ!？糞ツたれ!時間がないっていうのに」

すぐ近くで男達の声が聞こえる。そして、その声に被さるように響く激しい銃声。

(来た…)

絶望が心を覆う。分かつていてもつらい。

私の手を握る姉の手が僅かに震えているのが見えた。

姉も怖いのだ。でも、彼女は最後まで笑顔を浮かべ続けていた。

「これッ!預けとくから!絶対に放しちや駄目だよ!」

姉が熊のぬいぐるみを私の腕に押し付けている。

そのぬいぐるみは姉がとても大事にしているものだった。

(嫌だ!嫌だ!行かないで!)

私は叫んだ。姉は帰ってこない。約束は果たされないのだ。

それなのに…

「分かった。早く帰ってきてね」

ぬいぐるみを貰ったことで安心したのか、私は半泣きの顔で頷く。

「私は帰ってくる。それまで隠れているんだよ！じゃありゲルをお願い！」

「待つて！いかないで！」と叫ぶ。でも、私の声は届かない。

ここは失われた時間を永遠に再生し続ける牢獄でしかない。そう。結末は変わらないのだ。私は暗闇の中、一人、姉を待ち続ける。

響く怒声と銃声。どうせ起きたら全てを忘れている。粘つくような嫌な感触だけを残しながら…。

「気持ち悪い…」

伏倉亜季は汗で濡れた体を起こしながら呟いた。

ベット脇、サイドテーブルの上に置かれた時計は1時を少し過ぎた所だった。

寝床についたのが11時ぐらいだったから、まだ2時間ほどしか経っていないことになる。

体を動かす度に寝間着替わりに使っているYシャツが拘束具のように体にまとわりつき酷く気持ち悪い。

「また…あの日の夢か…」

額に張り付く髪をかき上げながら亜季は窓の方を見た。

案の定というべきか、薄いカーテンに覆われた窓の外では雨が降っていた。シトシトと大地を叩く雨音が世界を包み込んでいる。

雨の日は嫌いだ。その音に亜季は大きく溜息をついた。
雨の降る夜は決まって昔の夢を見る。森の中、一人泣いていたあの日の夢を。

「今頃、君のご主人様は何処で何をしているんだろっね？」

亜季はベットに置かれた大きな熊のぬいぐるみに話しかけた。
ぬいぐるみの首には平仮名で「りげる」と丸い字で書かれた赤い首輪がついていた。

姉が大好きだったリゲル。でも、その姉は今はいない。

「お前は何か覚えてないの？」

亜季は、もの言わぬリゲルを抱き寄せ、その頬に己の頬を擦り付けた。

年代物のリゲルは少しゴワゴワしたが、未だ柔らかさを失っていない。

あの日、何が起きたか分からない。気づいたら一人だった。

想い出せるのは真つ暗な森の中、一人大きな木に出来た洞の中で泣いていたことだけ。

「お姉ちゃん……」

亜季はリゲルの胸に顔を埋めた。

泣いていた自分に差し出された手。だが、その手は姉のものではなかった。

助けてくれたのは東日本陸軍の軍人達。亜季はリゲルを抱きしめる手に力を込めた。

たった一つの証。姉と自分を繋ぐ唯一の存在。
亜季はリゲルを手放せば全てが消えてなくなりそうで不安だった。
もう顔も思い出せない。でも、姉は確かにいたのだ。

「う…う…う…う…」

いつの間にか亜季の目には涙が溢れていた。
リゲルの頭が涙に濡れ色を変える。

「寂しいよ…寂しいよ。お姉ちゃん」

雨音に交じる小さな嗚咽。

雨は亜季の悲しみを覆い隠すかのように降り続けた。

「今日のフライトは苦労しそうだわ」

星空を覆い隠す分厚い雨雲。右手の古傷がジクジクと疼く。

西日本航空自衛軍厚木基地、第204航空隊に所属する西村楓は
疼く右手を抑えながら恨めしそうに空を見上げた。

深い緑で染められたフライトスーツに覆われた楓の右手には大き
な裂傷の後があった。

厳しい航空身体検査をパスしているのだから別に障害が残ってい
る訳ではない。でも、雨の日に限って傷が痛む。

「痛むのか？」

「ちょっとね…でも心配しないで。フライトには影響ないから」

公私共にコンビを務める高峰長門が差し出すマグカップを受け取りながら楓は答えた。

スクランブル発進に備えての待機。まだ夜は始まったばかりだった。

「影響があるなら飛ばさねーよ」

「大丈夫よ。なんなら試してみる？」

「女王様に逆らう馬鹿はこの基地にいないさ」

冗談めかして言う長門に楓は笑いながら腕まくりしてみせた。

袖から現れる傷跡。さり気無く視線を送る長門はそれ以上何も言わなかった。

弱さは隠さない。それが楓の強さでもあった。彼女が大丈夫という以上、心配してもしようがない。

傷跡を確認するかのように見て袖を直す楓を見ながら長門はフツと笑った。

「何よ？」

笑う長門を見咎め、楓は口を尖らした。

「何でもない。信用している」

肩をすくめて見せながら長門は自分のマグカップに口をつけた。口内から喉、そして胃の中へと熱い液体が滑り落ちていく。

一瞬の幸福。芳醇な香りと心地よい酸味が体の中に広がる。

カルモ・デ・ミナス。最近、名が知られるようになってきたこの豆は、コーヒーを作るにはギリギリの標高と手間をかけた生産処理により最高の味を誇る。

さすがはコーヒー大国ブラジルの誇る豆だ。当たれば大きいルワンダも良いが、やはりコーヒーはブラジルだなと長門は一人肯く。

だが世の中、コーヒーに拘りを持つ人間ばかりではない。長門は目を剥いた。

「おいッ！」

「何よ？」

「せつかく淹れたんだ。少しは味わってくれないかな。安物のインスタントじゃないんだ」

ビールかなにかのように一気に呷る楓に、長門は棚の方を指差しながら文句を言った。

彼の指の指差す方向には某有名コーヒー店のロゴが入った紙袋が置かれていた。

「ちなみに私物だからな。ちったあ味わえ」

「コーヒーぐらい好きに飲ませてよ」

長門の抗議など完全に無視し、楓はビーカーから二杯目を注いだ。確かに長門の言う通り、インスタントよりは香りがきつい様な感じがするが逆にそれが煩わしい。

欲しいのは苦味と熱さだけだ。眠気さまし以上にコーヒーに求めるものなどない。

抗議する長門に対し楓は、これ見よがしとまた一気に呷り、すぐに三杯目をマグカップに注いだ。

「そんなにガブガブ飲んで漏らすなよ」

そんな楓の様子に長門は、スクランブルがかかっても知らんぞと付け加えながらため息をついた。

味の分からぬ者、価値を共有できぬ者に何を言ってもはじまらない。

せめての嫌がらせとヤレヤレとオーバーに手と頭を振ってやる。

「フンツ！昨日や今日飛んだ若造じゃないのよ。自分の体調は自分が一番分かっ…」

長門の嫌がらせに楓が腰を浮かしかけたその時だった。待機室に警報が鳴り響く。

目を慣らす為に暗く照明を抑えられた部屋に鋭く神経を掻き巻くベルの音が鳴り響き、待機していた隊員達が一斉に格納庫に通じるドアへと走り出す。

「アンタがいらぬこというから！」

「俺のせいじゃない！文句なら東の連中に言ってくれ！」

楓と長門も互いに罵り合いながらも待機室から格納庫へと飛び込む。

格納庫の中では、出撃準備を整えた二機のイーグルが彼女達の到着を待ち受けていた。自分の乗機に向かって駆けていく二人。

コクピットに掛けられたラッタルを勢いそのままに駆け上がり、脇に掛けておいたヘルメットを被りながらコクピットへと座る。

楓と長門がコクピットに座りヘルメットを被る頃には、機付整備員達による出撃準備は完了していた。

大きな音を立てて開かれる防爆扉。格納庫にムツとした湿り気が押し寄せてくる。格納庫の外は激しい雨が降り続いていた。

眼前にミサイルの安全ピンを持った整備員が現れ、ピンが抜けたことを知らせてくる。

「視界が悪そうね」

楓は無意識に呟いていた。

広がる暗闇。防爆扉の奥は強い闇が支配していた。

左右に一度大きく振られた誘導灯が外に向け振られる。

「Bandit、How do you read? (こちらリゲル、GCI、感度いかがか?)」

「Rigel Loud and Clear …… (GCI、感度良好 ……)」

楓は、GCI(要撃センター)との無線確認を行いながら、機体を外へと発進させた。

響き渡る轟音。石川島播磨がライセンス生産するF100が鉄の塊を空を翔る大鷲へと変える魔法の言葉を紡ぎだす。

名戦闘機に名エンジンあり。名エンジンメーカーPW社が世に送り出したF100エンジンは単発で10トン以上の推力を叩き出す。

「敵は東みたいだな」

「BB、無駄話は後にして」

グラスコクピット化が進むF-15J戦闘機。初飛行から30年以上経つ老鷲は、近代改装を受け続けることにより未だ日本の空の守護神であり続けていた。

GCIから送られてくる敵戦闘機の情報。合法非合法問わず収集され続けた敵性情報から防空識別圏を飛ぶ敵機の種類は飛ぶ前から分かっている。

長門の無駄口を止めながら楓は液晶画面に映し出される敵機の情報を素早く確認した。この間にもF-15は空を舞う準備を続けている。

(Su-27Jが二機か・・・いつもの急行便ね・・・)

東日本が装備するSu-27は、大雑把なロシア人が作ったとは信じられない美しさを持つ大型制空戦闘機だ。

一目で空力性能に優れていると分かる見た目に違わない性能を持つ。

ロシア人が設計し、日本人の緻密さによって組み上げられたSu-27J、通称JフランカーはF-15にとっても侮れない強敵だった。

楓は気を引き締めた。指導者の交代時期が近付きつつある東日本は混乱の度合いを強めつつある。

「偶発的」事故が起きないとは限らない。同じような経緯を持つ隣国がフリゲート艦を撃沈されたのは、つい最近のことだった。

「Riegel、Runway01 Clear Take Off! (滑走路クリア)。リゲル、発進せよ！」

「Rog Riegel、Take Off! (了解。リゲル、発進する)」

楓はスロットルを一杯まで押し込んだ。

ガチツと一度止まる所から、さらにもう一度。ミリタリー出力。地上に繋ぎ止められていた大鷲は咆哮を上げ、大空へと駆け上る。

「Riegel、Good Hunting(良い狩りを、リゲル)」

「Thank You Bandit」

酷く好戦的な管制官の激励に苦笑いを浮かべながら、データリンクで送られてくる座標に向け楓はF-15を向けた。

後ろは見ない。長門がついてきていることは見ないでも分かった。

「雲が厚い」

キャノピーを叩く雨と星空を覆う雲が夜をさらに暗し、楓の体を闇が包み込む。

体が空に投げ出されているかのように感じるF-2支援戦闘機ほどではないものの、イーグルのコクピットも抜群の見晴しを誇る。

夜間視力を奪わないよう淡い緑で表示される情報を見ながら楓は呟いた。

空間失調症一歩手前。計器の助けが無くては自分がどういう態勢でとんでいるかも分からない。

GCIから送られてくる情報を元にHUDに映し出されるキューポイントに機体軸を合わせる。

「雨の日は嫌いだ」

小さな頃、妹を庇って犬に噛まれた傷。操縦桿を握る右腕に鈍痛が走る。

今頃、あの子はどうしているのだろうか？楓は雲に覆われた空を見上げた。

「貴方もこの空を見上げているのかしら？」

何も映さない真つ暗な空。

楓は妹の泣き顔をキャノピーに見た気がした。

「馬鹿・・・」

楓は樹脂製ヘルメットに覆われた頭を僅かに振った。

守れなかった約束。 たった一人山に取り残された妹が生きている可能性は小さい。

それに……… 楓は浮かんだ可能性を必死に打ち消した。 生きていたとしても会える可能性は皆無とって良い。

彼女の頭の中に浮かんだ場所はある意味、宇宙より遠い場所だった。 東日本人民共和国。

楓にとってその国は打倒すべき相手。 小さな島を二つに分け、西日本が覇権を争う敵国だった。

「雨の日は嫌いだ」

何かを忘れないように疼き続ける右腕。

楓はもう一度、空を見上げながら呟いた。

R i g e l (後書き)

感想は作品制作の糧となります。

お時間があれば、作品を読んで感じたことなどを教えて頂けると幸いです。

Security (前書き)

この話はリアルとリンクしておりません。

また、国名や人名、主義主張は妄想ですのであしからず・・・

Security

弱い陽光に重たい雲。

鉛色の空が頭上を覆うことの多い北の空も3000メートルも上がれば関係ない。

足元に浮かぶ雲。 陽光を遮るものはキャノピー一枚だけだ。

「亜季ちゃん。 やっぱ空はいいねー。 なんだか体が軽くなったみたいだよ」

「・・・もう良い年なんだから亜季ちゃんは辞めて」

「ええー！？ 亜季ちゃんは亜季ちゃんだよ」

「・・・・・・・・・・」

北緯38度1分東経138度22分、佐渡島上空3000メートル。

日本人民共和国が支配する空の上を戦闘機のコクピットという最高の観覧席で味わいながら伏倉亜季空軍少尉は溜息をついた。

これがSu-34なら拳骨で黙らせることができるのに・・・。

神をも恐れぬロシア人達（元より彼らに信仰心などないけど）は時折、世間の度肝を抜くトンデモ品を世に送り出す。

戦闘攻撃機ながら並列という操縦席配置を持つSu-34もその一つだ。

バックミラーに映る能天気な笑顔。

亜季にとっては航空学校からの腐れ縁でもある東山利恵少尉が楽

しそつに座っていた。

背後で「ちゃん」づけで自分のことを呼ぶ相棒の顔を見て、亜季はもう一度溜息をつく。

残念なことだが同じS U I 27の血筋を引くと眷属とはいえ、人民空軍が装備する95式戦闘攻撃機の操縦席は同じ複座でも至極まともな縦列配置。

パイロットになる為に鍛え上げた両腕も背中中のシートを超えることは出来ない。

「もう子供じゃないん・・・」

「ぬいぐるみと添い寝している人が何を言いますか？」

「なっ！？なっ」

グラリと95式の機体が大きく揺れた。

言いかけた言葉に被せるように発せられた利恵の言葉に亜季の顔が朱に染まる。

「危ないなー。亜季ちゃん、何やってんだよー」

「な・なんでアンタが知っているのよ！？」

クスクスと笑い声まで上げ始めた利恵に亜季は猛然と噛みついた。なぜ・・・知っている！？亜季の脳内に毛並がボサボサになりくたびれたリゲルの情けない顔が浮ぶ。

確かに自分の部屋のベット、その枕元にリゲルは寝ている。

学校を卒業し、全ての課程を卒業した今、リゲルを隠す必要は無

くなつたからだ。

軍隊における幹部の地位は大きい。兵士達とは待遇が違う。個人に割り当てられた部屋も恩恵の一つ。

学校には持ち込むことの出来なかつたりゲルも個人部屋なら遠慮する必要もない。

「この前、亜季ちゃんの部屋でー」

「寝室にまで入つたのか！？お前は」

年甲斐もなく人差し指を口元に当てながら言う利恵に亜季は怒りの声を上げた。

部屋が隣の利恵は、頻繁に亜季の部屋に遊びに来ていた。そのどこかで寝室に侵入したのだろう。

確かに20歳が近い娘の寝室に大きな熊のヌイグルミは少し体裁が悪い。いや、だからこそリゲルの居場所は寝室だったのに……。

「訓練学校の時は、よく一緒に寝たじゃんかよー」

「あの時とは違つてしょー！」

亜季の怒りは収まらない。幹部用宿舎は冷暖房が完備されている。大部屋で、ろくな暖房も効いていなかった訓練学校とは違つのだ。

「一緒にベットで毎晩、体を温めあつた仲じゃない。寝室チェックしたぐらいで怒らないでよ」

少しは悪いと思つたのか利恵は口元に当てられた指を降ろしながら言ひ。

「あれはしかたなくよ！私にその気はない！」

「ええー！？そうなの？あれだけ私の体で遊ん・・・」

「うるさい！人の過去を勝手にねつ造するな」

確かにあの頃は一つのベットに何人もの訓練生が集まって寝たけど・・・言葉とは裏腹に怒りの代わりに懐かしい思い出が亜季の頭をよぎる。

噂に聞くシベリア収容所ほどではないにしろ訓練学校の居住環境はそれは酷いものだった。

部屋の中央に置かれたダルマストーブ一つではせいぜい温度をプラスに留めるのが精一杯。

厳しい北国の夜を乗り切る為に同期生達は共に抱き合って夜を過ごした。

ストーブの放つ赤い光と轟々と呻り声を上げる風雪の声。

一つのベットに互いの身を押し付け合いながら、励まし合い厳しい訓練に挑んだあの日が懐かしい。

「やっとここまで来たんだ・・・」

「そうだね」

呟くように吐かれた亜季の言葉に利恵が同意する。

Su-27のライセンス生産から始まり、バージョンアップを繰り返しながら東日本の主力戦闘機の座を占める89式戦闘機。

その89式を元に再設計。戦闘爆撃機、はやりの言葉に直すならマルチロールファイターとして生み出されたのが95式戦闘爆撃機

だった。

電子兵装では西側に一步劣るものの搭載量や運動性能など基本性能では米帝の装備するF-15ストライクイーグルを上回る最新鋭機。

「西の連中になんかには負けない」

95式のコクピットシートこそが亜季達が手に入れた努力の証。勝者の座といえた。

亜季は南の方に視線を向ける。

バイザーに隠れているが気の強い視線が遙か彼方に引かれた国境線を射抜く。

「その意気。その意気」

「アンタが言うとな力が抜ける」

「亜季ちゃんの意地悪！」

口を尖らせる利恵に亜季は口元を歪ませた。シートの横から軽く手を振って謝ってみせる。

「ずっと飛んでいられれば良いのに」

亜季は小さな声で呟いた。

気心の知れた仲間到最后鋭の戦闘機。飛んでいる間だけは全てが忘れられる。

視線を下へと向ける。眼下は相変わらず厚い雲に覆われていた。

「……空は光に満ちているよ。お姉ちゃん」

暗く寒い大地。空はこんなに光に満ちているというのに。
利恵の笑い声とリユースA-L131FPターボファンエンジン
が奏でるの轟音の中、亜季はどこまでも続く蒼空を見続けた。

取り方によっては、その音も轟音といって良いかもしれない。
サイドテーブルに置かれた目覚まし時計がジリジリと声を上げな
がら身を震わせる。

薄いレースのカーテンが引かれた部屋はすっかりと光を取り戻し、
朝の訪れを住民に知らせていた。

しかし、アラーム音とは裏腹にベットの中、白いシーツに包まれ
た彼の主人は起きる気配さえみせない。

目覚ましに与えられたミッションは前日に指定された時間までに
主人を起こすこと。

音量アップにスヌーズ機能。感情など持つはずもない機械が仮初
めの意識を持ったかのように主人を起こそうと奮戦する。

「……五月蠅い」

アラーム音に混じり、小さな声がシーツの中から上がる。

もう少し。さあ、起きろ！目覚ましは更にアラームの音を上げて
いく。

「……五月蠅い……五月蠅い……五月蠅い……五月蠅い……！」

目覚ましの努力は報われたかにみえた。

跳ね上げられるシート。寝癖でボサボサになった髪に殆ど閉じられた眼をシヨボつかせながら西村楓は怨嗟の声を上げた。

その姿に追い打ちをかけるように更に音量を高めていく目覚まし。彼の仕事は主人に朝を届けること。

だが・・・、

「五月蠅いったら！」

楓の腕がサイドテーブルの上を薙ぎ払う。

いつもならそんな暴挙に出ることはないのだが、異常なほど回数を増しているスクランブル発進と報告書の山が楓から貞淑という言葉を奪っていた。

薄明りに佇む寝室。8畳ほどの部屋に置かれたベットの脇には脱ぎ散らかされた制服や下着がそのまま床を埋めている。

目覚ましを一撃し、そのまま楓はベットに倒れ込んだ。

ポフツと言う音とともに肩口で切り揃えられた髪が枕に広がる。

先ほどまで鳴り響いていたアラーム音の代わりに部屋に響く小さな寝息。西村楓の朝はまだ先になりそうだった・・・。

「・・・で、寝坊の結果がこれだと・・・」

テーブルに並べられた料理を見ながら高峰長門は呆れたように言った。

「御免なさい。これでも頑張ったのよ」

「久しぶりに手料理を振る舞ってやるから出てこいって言ったのは

誰だっけ？」

「ほんと申し訳ない」

「拝むように両手を併せて謝る楓。」

彼女と長門に挟まれたテーブルの上には野菜と豚肉を湛えた鍋が置かれていた。

白菜に豚を織り込むようにして作られた豚鍋。見た目こそ花のように綺麗だったが・・・所謂、手抜き料理だった。それこそ30分もあれば用意できる。

「まあ、手の込んだ洋飯にはほど遠いけど、こいつには丁度良いかな」

それに珍しいものも見れたしな・・・クツクツと音を立てる鍋を前に珍しく頂垂れる楓の姿に長門は苦笑しながら足元の袋から焼酎の瓶を取り出した。

「最近忙しかったからな。無理しなくていいさ」

「次こそは必ず・・・」

せつかく二人の時間が取れたのに・・・お前らのせいだー！つと心の中で、東日本空軍の戦闘機や電子戦機を片っ端から叩き落とすしながら楓は再び頭を下げた。

長門を食事に誘ったのは楓の方からだった。二人が付き合いだして一年。戦闘機パイロットという過酷労働の下では、なかなか互いの時間が合うことも少なく何かと不便。

部隊では嫌でも顔を会わせるが隊内でおっぴらにベタベタする訳にはいかない。例え、周知の事実でも公私に一線を引いているから

こそ同じ部隊に入れるのだ。

「だから、無理すんなって。おっ、そろそろよさそうだな。いただきます」

謝ってばかりの楓の姿を笑いながら長門は小皿に白菜と豚肉、スープをよそう。

楓には悪いがスクランブル明けて疲れ切った状態で、揚げ物やソースこつてりの料理よりあっさりとした豚鍋の方が食べれる。

コンソメベースであっさりとした豚鍋は疲れた体でも十分に食欲をそそる一品だ。それに持ってきた焼酎にも合う。

「うまいな」

見た目通りの味わいという調理した者に失礼かもしれないが、これが出来ない者も多い。

出汁の染み込んだ白菜に柔らかく煮込まれた豚肉。唐辛子に山椒、控え目に効かされた辛めの味付けも食欲をさらに促進させる。

「ありがとう」

言葉少な目に黙々と箸を進める長門をうれしそうに見ながら楓も箸を取った。

今更お世辞の言葉なんていらぬ。訂正、たまには欲しくなるけど、無理に言葉を連ねて褒められるより箸を進めてくれる方がうれしい時もある。

（幸せだな）

長門の持ってきた焼酎を彼と自分のコップに注ぎながら楓は目を細

めた。

「東日本空軍の増強は我が国にとって大きな脅威となり、早急な対応が必要と言う声も上がっていますが・・・」

「過去の不幸なすれ違いを乗り越え、東日本とは友愛の精神を持って当たりたい。同じ日本人、私は彼らと分かり合うことが出来ると確信しております。軍事力での恫喝ではなく粘り強い話し合いによって事態の回復を図りたいと思います」

「では国防費の増額は・・・」

「社会保障と税態勢の健全化、これこそが我が民自党の国是であり、むやみな軍拡などは考えておりません」

テレビの中で、幾本ものマイクを突き付けられた小太りで目の大きな男がボソボソと語っていた。

アルコールに浸食された頭でも、彼の言っていることがおかしいことが分かる。

「現場の身にもなってみやがれ」

「どつしたの？何かあった」

食事の片づけを終え、エプロンを外しながら楓が横に座る。

「国防費は据え置き。これで俺達は、あの95式の前に素っ裸で放り出されることが決定した訳だ」

イラただしげにテレビの方を指差しながら長門はコップに残った焼酎を一気に呷った。

テレビに映る男は日本国総理大臣坂秀雄。長門や楓達、日本国軍人にとって最高司令官にあたる人物だった。

「米軍の追い出しに国防予算の縮小。国境線一つ挟んで軍拡に動んでいる仮想敵国を抱えながら自ら鎧を脱ぐ奴がどこにいる？」

「モットーは友愛だからね。国家安全保障なんて言葉は総理の辞書にないのよ」

甘えるようにそつと長門の肩に自分の頭を寄せながら楓は言った。東日本に対して強硬的な姿勢を取っていた自由党に代わって政権を取った民自党は、こと軍事面に限定するなら敵国以上の厄災を日本軍にもたらした。

国防予算の縮小に始まり、在日米軍の国外退去。日米安保こそ未だ保たれているものの日本内乱以後、最大の危機といって良いほど東西の軍事バランスは崩れつつある。

必然と偶然。まさかまさかといっている内に状況は悪化し続けていた。

「沖縄でもめた米軍はF-22のライセンスを土壇場でひっくり返すし。奴らが本気になったら手酷いことになるぞ」

「世界人類みな兄弟。信じる者は救われる」

「・・・俺は本気で言っているんだが・・・」

長門は楓の冗談を咎めるように肩を大きく上下させる。長門の肩に乗せられた楓の頭が小突かれたように揺れた。

「ごめんなさい。それにしても時期が悪かったわね」

「ああ。まったくだ。東だけでも厄介なのに。最近是中国も活発に動いている。まあ、南は海軍が抑えるとしてもだ。ヤバいことにはかわりない」

人口13億人のマンパワー。経済的に頭打ちを迎え伸び悩む日本や欧州、米国を尻目に発展を続ける中国は、その経済力を軍事力に転換しつつあった。

旧式兵器ばかりで数ばかりと揶揄された人民軍は徐々に近代戦闘に耐えうる軍へと姿を変えつつある。

「皮肉よね。中国が発展すればするほど東の財政事情が潤うなんて」

「東側の軍事工場。ロシア人も半ば公認だからな。設計はロシア、作るのは日本。チャイナバブルで奴らは大喜びだ」

資金と兵器を循環させることによって力を増しつつある東日本。

西と東の格差は埋まりつつあった。

経済力で東日本を圧倒していた西日本。少々の軍事優勢など吹き飛ばすほどの経済格差が両国間に存在していた。

クラウゼビッツの生きた時代とは大きく様相を変えつつある世界だが、いまだ戦争は外交の延長線上にある。

近代戦にはとにかく金がかかる。第1撃を防ぎえる能力、暴発を躊躇させるだけの戦力があれば西日本の安全保障は確保されていたのだ。

今、その抑止力が揺らぎつつある。

「国防音痴の総理に予算縮小。米軍の国外退去に周辺諸国の著しい軍拡。これほど悪い札が連続するのも珍しいわね」

「まったくだ。それに・・・東の指導者の交代も近いだろ。北朝のように後継者の力を見せるための恫喝に出るかもしれん」

「神よ。我を救いたまえ」

ソファの背もたれに頭を預けながら楓は天井を仰ぎ見た。絶望と違って良いのか。でも現実は何も変わらない。国民の多くは危機が迫っていることさえ認識できないだろう。

東日本や中国より長引く不況と社会保障問題の方が大事だからだ。

「海軍の航空母艦をピースポートとして東南アジアに・・・」

テレビで自分の妄想を語る坂の声が耳を打つ。

楓は隣に座る長門の手に自分の手を重ね握りしめた。

「平和は有料なんだよ」

アルコールで痺れる意識。楓はゆっくりと瞼を閉じた。

Happy life

「Rigel Check 6 (後方確認) Bogy (敵機)
Angel 240 (高度24000フィート)」

「・・・Rog (了解)」

地上要撃管制官の声とほぼ同時に鳴り響くレーダー警報機の悲鳴。神経を掻き乱す単音が耳朶を打つ。

声と同時に身体が動く。ハーバレル。空と海が入れ替わり、真っ青な南海の海が視界を埋める。

機体を背面降下に入れながら日本航空自衛軍所属西村楓大尉は答えた。こちらの高度は200ちよつと。相手の方が有利なポジションを占めている。

(いくらなんでも・・・これは・・・)

いきなりの大ピンチに楓は心の中で罵倒の声を上げた。攻撃を受けるまで全然、敵機的位置が分からなかった。

降下することにより位置エネルギーを運動エネルギーに変換しながら全力で逃げるF-15Jイーグル。

坂道を転がり落ちるかのような急降下に下腹部に嫌な感覚が走る。胸から足へと血液が体の下部へと落ちていくような不愉快な感覚。

機体進行軸と視線が一致しない。訓練で鍛え上げられた感覚と己

の手足を信じながら楓はマイナスGの不快感に耐えながら蒼空の中、敵機の姿を探す。

(どこだ!?!?!?!どこにいる)

真つ直ぐに飛べば刹那の間に撃墜されてしまう。

降下しながらもシザース機動を織りませ、不規則に機体を揺さぶりながら飛ぶが未だ警報は鳴りやまない。

操縦桿を握るグロープの中、手がじつとりと汗ばむ。不安と焦りが徐々に心を覆っていくのを楓は感じていた。

(まだまだ・・・敵の姿も見ずにやられてたまるか!?!)

楓は自分自身を必死に叱咤する。

勿論、この間も彼女の眼は敵機の姿を蒼空に追い求め、手足はイーグルを操り続けていた。

激しく動かされる化学繊維で編まれたヘルメット。現代の魔弾ともいえる対空ミサイルの命中率は100パーセントに限りなく近い。警報は続いていた。敵機はまだ後ろにいる。機体を再び反転させシヤンデルへ。再び、視界を蒼空が埋める。

降下することによりたつぷりとパワーを稼いだイーグルは楓に答えるかのように鋭く身を擦る。

「・・・In Site・・・ちっ・・・Raptor(敵機発見敵はラプター)」

(こんなに近くにいたのか!?!)

報告しながら楓は舌打ちした。高速ですれ違つF-15に良く似た機影。

しかし、戦闘機パイロットとして鍛え上げられた楓の眼はその機体の正体をはつきりと掴んでいた。

ステルスを意識し、エイを思わせるようなのっぺりとした機体。そして尾から突き出た特徴的な推力偏向ノズル。

F-22ラプター。F-15イーグルに変わり米空軍の世界最強の座を守護する新たな戦いの翼。

(よりによってラプターとはね・・・)

特徴的な機影を視線にとらえ続けながら楓は体の奥底が熱くなるのを感じていた。

訓練で対戦する機体や部隊構成は相手に「出会う」まで教えられない。

(ぐっ・・・逃がすか！)

スロットルを僅かに緩め、機体を旋回に入れる。

翼を翻す大鷲。体に締め付けるGが最適のコーナー・ベロシティを楓に教える。やみくもにアフターバーナーを吹かしても機体は曲がらない。

だが、そんな楓の努力をあざ笑うかのようにラプターは彼女の視線の端へ端へと進んでいく。早い。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

自分の吐息の音がうっとしい。Gが体と精神を締め付ける。

ラプターとイーグルの機体性能差は圧倒的だ。

米空軍の実験でラプターは従来機との戦闘訓練において144対1という実験結果を疑うような結果を叩き出している。

「じほつ！・・・それでもっ！」

影だけでも逃がさない。楓はラプターを追い続けた。

シャンドルの途中、いやラプターはいつでもこちらをKILLしてきた。遊ばれてなんかやるものか。

ラプターの姿を視界内に必死で捉えながら楓は叫んだ。無理に叫んだ為、肺が悲鳴を上げ咳込む。だが楓は、その痛みを無視した。

負けを望む戦闘機パイロットなんて世界中、どこの空を探したっていやしない。

体の痛みは我慢できるが傷つけられたプライドは容易に癒されないのだ。

攻守が入れ替わり、ラプターを追うイーグル。ドッグファイト。

推力偏向ノズルの恩恵を受け、旋回径の内へ内へと切り込むラプターに対し、イーグルは機体の限界性能を持って挑む。

右旋回の途中、空の法則を半ば無視するかのように直線的に進路を変え、跳ね上がるようにして上昇するラプター。

逆方向に吹っ飛ぶように機体進路を向けたラプターを追い、イーグルは素早く機体をハーフロールに入れ、旋回。

ラプターの僅かに外を通り、イーグルの翼が蒼空にラインを引く。蒼空に引かれる二条のコントロール。直線と曲線が織りなす幾何学模様が大空のキャンバスに描かれていく。

それは形こそ変えど一流の絵画と同じ価値を持つ芸術だった。

本物の絵画と違う所は、見る者を選ぶことと、刹那の時間しか楽しめないこと。

イーグルとラプターの戦いもその原則を変えることはなかった。

変則のシザース機動を繰り返しながら互いの背を狙うイーグルと

ラプター。

ついに楓の眼がラプターの背を捉える。

「Riegel・・・」

操縦桿を握る手が兵装選択ボタンをクリック。選ぶのはAAM5、04式対空誘導弾。

大柄で角ばった主翼。HMD、ヘルメットの動きと同調したミサイルシーカーがラプターをロック。単音から長音へ。

勝利を確信し、楓はトリガーを引く指に力を込める。

ラプターが動いたのは、その瞬間だった。

「Fox・・・ツ、何ッ!？」

楓は驚きの声を抑えきれなかった。

いきなり機首を上げるラプター。高度変化なし。視界一杯に特徴的な機体が壁のように聳え立つ。

楓に出来たことは激突を避ける為に咄嗟にロールを打つことだけ。機体全体をコントレールで真っ白に染めながら後方へとラプターが消えていく。

コブラ機動。

1989年、パリ航空ショーにおいてヴィクトル・プガチョフによって初めて世に出た戦闘機動が場所を変え、グアムの地で再現されたのだった。

「ふざけんじやないわよ！あんなの反則よ！反則！安全守則も何もあつたもんじやないじやない」

「分かった・・・分かったからもう少し声を抑えてくれ・・・」

カウンターの中でコップを磨くバーテンの視線が痛い。

隣に喚く酔っ払い、楓の肩に手を置きながら高峰長門は言った。

こんなことなら労を惜しまず、基地の外に出れば良かったと後悔するが今更遅い。

(はあ・・・やっちゃまったなー)

グアム、アンダーセン米空軍基地。

その一角にあるオフィサーズクラブのスツールに腰掛けながら長門は溜息をついた。

アルコールと興奮で顔を朱に染めた楓はいつもとは違う魅力があるがそれも限度がある。

「なんで長門は悔しくないのよー」

そんな長門の気持ちを知らずに、また隣で酔っ払いが氣勢を上げる。

昼に行われた米軍とのDACT、異機種空戦訓練においてF-22ラプターに負けたのがよほど悔しいらしい。

衝突回避を優先し、ラプターを回避した楓はその直後にガン攻撃を受けて撃墜判定をもらっていた。

「いや俺だって悔しいさ。でもな。考えてみるよ。相手はラプターだ。本当ならBVRでやられていた所を格闘戦に付き合ってくれた

んだ。少しは感謝しろよ」

そういう長門は遠距離からのアムラームの一撃で撃墜判定を貰っていた。

BVR（視界外戦闘）と格闘戦。政治的問題から同盟関係にヒビが入りつつある中、米空軍は良くやってくれたといえる。

彼らは自分達の持つジョーカーの力をわざわざ曝してくれたのだ。世界唯一のステルス戦闘機との空戦訓練は、西日本にとってこれ以上ない貴重な経験となるだろう。

「将来的には中国やロシア、ロシアが作れば当然、東の連中も導入するだろう」

ウイスキーの入ったグラスを弄びながら長門は言葉を続けた。グラスの中の氷がクルリと回る。

今は同盟国であるアメリカしか持っていないが、将来的に仮想敵である東日本や中国、ロシアがステルスを導入する可能性は大きい。身を持って体験したステルスの威力。東側が本格導入する前に対策を立てる必要がある。それが出来なければ西日本は終わりだ。

「三型にはIRSTや新型誘導弾の搭載も予定されている。それにフランカーだつてコブ・・・」

そこまで言つて長門は口を閉じた。いや、閉じずにいられなかった。

東側と酔っ払いに正論は通じない。彼はそのことをすっかり忘れていた。

今の楓にとつての敵はラプター。そして必要なものといえばIRSTでも新型誘導弾でもなく愚痴を聞いてくれる男だったのだ。

静かになつたと思い、ふと隣の方を見た長門の眼に酔っ払い特有

のアルコールに侵されトロンとした目つきで自分の方を睨みつける
楓の姿が飛び込んでくる。

長門が不味いと思った時には全てが手遅れだった。

「長門の馬鹿ー！負けて喜ぶ奴がどこにいるのよ！この玉無し！チ
キン！臆病者ー！×××！」

ギヤアギヤアと喚きながら楓が掴みかかってくる。

「落ち着け！落ち着けて！×××は言い過ぎだったの！それに
ほらッ！周りを見てみる。みんな、こっちの方見てるぞ！」

女だが相手は戦闘機パイロット。鍛えられた腕力は侮れない。

そんな楓を長門は必死に収めようとするが、彼女の怒りは高まる
ばかりだった。

うーうーと小動物のような呻き声とともに拳の雨を長門に降らせ
る。

そして、悪いことに状況も長門に組しなかった。

普段は静かなオフィサーズクラブ。しかし、この日は休みの前日
ということも多く、戦闘機パイロットが来店していた。

今回、グアムに派遣された日本軍の中で女性パイロットは楓しか
いない。

日本よりよほど門戸の開かれた米軍といえどもまだまだ女性戦闘
機パイロットの数は少なく、物珍しさから楓は基地内でも一時的な
時の人だ。

その楓が男に殴りかかっているとみなれば騒ぎにならない訳がな
い。囃し立てる様な口笛とともに歓声上がる。

「せんきゅー！じえんとるめん！」

声援に調子に乗った楓がほとんど回っていない舌でギャラリに
応える。

そして、無責任な民意を背に長門への攻勢をますます強めていく。

（もう・・・こうなったら為るようになれだな・・・）

せつかくのグアム。気分的には楓と二人で静かな時間を送りたか
ったのだがこうなつてはしょうがない。

背中や頭に走る痛みを無視しながら長門は苦笑いを浮かべた。

華やかな喧噪が周囲を支配する中、ガードする手の隙間から楓の
顔をのぞき見る。

そこには楽しそうに自分に向かって拳を振り下ろす楓の姿があっ
た。

朱に染まった顔に、いつもより目じりの下がった瞳。

（最近忙しかったしな・・・たまにはこういうのもいいか）

長門は笑みを浮かべた。

心の辞書に洋酒と訓練の話は禁句と書き加えながら・・・。

南洋の空が生命感溢れる色濃い青なら、冬の日本海の空は凍てつ
いた灰色の空といえる。

薄雲のベールに弱い陽光。晴れていてもどこか白濁とした色合い

を見せる空が気分を滅入らせた。

(高度を上げることが出来ればな・・・)

95式戦闘爆撃機のコクピットの中、東日本空軍伏倉亜季少尉は、心の中でそつと呟いた。

雲を抜ければ澄み切った空がある。しかし、現状は伸ばす手はあつても掴むことは許されない。

高度15メートル。感覚的には地表に張り付くような低高度を飛ぶ95式。

気をつかってくれているのだろう。いつもは五月蠅いぐらいに元気な後席の利恵も今日は沈黙を保っている。

対地攻撃能力を付与されているとはいえ95式は、米帝のF-15Eストライクイーグルが装備するLANTIANのような高性能な航法システムを持たない。

地形追従用レーダーと前方監視用の赤外線センサーこそ装備しているものの自動化されておらず、パイロットの腕に頼る部分が大きいのだ。

阿賀野川と信濃川に挟まれるようにして築かれた新潟空軍基地を飛び立ってから30分。

一度、日本海に出るからランドマークである弥彦山を左に見て旋回。平野部を抜けた所で一気に高度を落とし、内陸に向かって侵攻開始する。

越後山地に連なる山々に機体を擦り付けるようにして川を溯り、谷を抜け、稜線より低く飛ばなくてはならない。

難しいけどやり遂げる。亜季は冷静さの中で、静かなる闘志を燃やしていた。

新鋭戦闘機パイロットの座を手に入れたといっても、まだまだ新人の亜季にとつて95式を手足のように操り、一人前と認められるまでには、まだまだ上るべき階段は多くあった。

今回の低空侵攻訓練もその一つ。さらには今回の訓練をパスできたとしても次は同じことを夜間に行わなくてはならない。

東日本空軍では夜間低空侵攻が可能になって初めて一人前の95式パイロットと認められるのだ。

それまではOJT、飛行隊に配属後も訓練を続け、任務につくことを許されない。

「目標まで10キロ。攻撃準備」

「了解。タイミングは任せるわ」

後席で兵装管理を担当する利恵が声を掛けてくる。

訓練目標である田子倉ダムまで後少し。亜季は酸素マスクの中、唇を噛んだ。

右手に守門岳。その少し奥、左に見える浅草岳の裏に目標はある。

「いくよー」

「了解！」

利恵の声を聞きながら、亜季はスロットルを微妙に調整しながら機速を調整していく。

守門岳と浅草岳の間を抜けて、左旋回。浅草岳をグルリと周りながらダムを爆撃。その後は同じ飛行経路を通って離脱する。

迫る山肌。翼端が木々に触れるかのような錯覚。浅草岳を回った瞬間に機体軸をダムへと乗せる。

「用意・・・てー」

後席で利恵の声が聞こえる。しかし、亜季に戦果の確認をしている暇はなかった。

再び山肌が迫る。ダムを飛び越え、高度を下げるが再び浅草岳が道を塞ぐ。北へと延びる浅草岳の峰が離脱の障害になるのだ。

飛行データは後で全て解析される。誤魔化しはきかない。

亜季は山に突っこむかのように勢いで95式を飛ばした。ハードル選手のように峰を飛び越えては、すぐに高度を下げる。

(絶対合格するんだ！)

冷静と情熱の狭間で亜季は、立ちふさがる越後の山々をキツと睨みつけた。

「かんぱーい」

綺麗にはもる二つ声。

続いて打ち合わされたコップが立てる澄んだ音が響く。

「ぶっはー！やったね！亜季ちゃん！」

コップに注がれたビールが瞬く間に消える。

一気にコップを空にした利恵は、アルコール濃度の高い息を吐き

ながら口を開いた。

年頃の乙女としては少し恥じらいが足りないかもしれないが、この場所にそんな些細なことを気にする者は誰もいない。

「まあね。パイロットの腕が良いから当然でしょ！」

「ええー。爆弾をダムに命中させたのは私だよー」

少し顎を上向きに胸を張る亜季に利恵が抗議の声を上げる。

勿論のことだが机に置かれた亜季のコップも利恵のものと同様、空になっていた。

「何言っているのよ。機体姿勢良し。ドンピシャの侵入コースだったでしょ。私のお蔭だね」

片目を瞑り、利恵に指鉄砲をつきつけながら亜季は答えた。

「爆弾を落としたのは私だもん！」

パイロットも重要だが戦術航空士（米軍で言うところのWSO、兵装システム士官）も重要。

自分と亜季のコップにビールを注ぎながら利恵も食って掛かる。

「何よ！私が飛ばさなければ、そもそも目的地につけないでしょうが」

テーブルに両手を叩きつけ亜季は身を乗り出す。

「何さ！私がいなくちゃ航法も爆撃もできないもん！」

負けじと利恵も身を乗り出す。

「私のお蔭！」

「私だもん！」

威嚇しあうようにうーうーと呻りあいながら顔を突き合わせる亜季と利恵。

注文の途中、二人の喧嘩を見止めた店員がハラハラしながら引く末を見守る。

しかし、彼の心配は杞憂だった。

「ふっ……ふっふふふ」

最初は小さく、そして徐々に大きく。どちらが先かなんて問題じゃない。

合わせられたおでこ。亜季と利恵の肩が小さく揺れる。

「ふっ……はははは！おめでとう。利恵」

そして、ついには我慢しきれなかった亜季が顔を上げ笑いながら手を上げた。

「はははは！おめでとう。亜季ちゃん！」

上げられた手に自分の手を叩きつけながら利恵も笑う。

昼間に行われた低空侵入訓練、命を削るような訓練の評価は「優良」合格だった。

「次は夜間よ！明日からも気合入れていこう！」

「了解ー！」

声とともに打ち合わせられる二つのジョッキ。

亜季と利恵の顔は喜びに満ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218p/>

鼓星の下で ~The Sky Where You Were~

2011年3月12日08時00分発行